

「女郎蜘蛛」

永井 優唯

概要

研究発表会を控えている不真面目な歴史考古学部。絵麻の資料も白紙のままだ。そんな中、カウンセラーのあやめが学校にやって来て、生徒たちの人格が不自然に変わっていく。あやめは生徒から「感情」を奪っていたのだった。更にあやめは、1年前に行方不明になった絵麻の姉の姿によく似ていて……。

人物

とおの 遠野 絵麻	歴史考古学部の部員
にしな 仁科 夏乃子	歴史考古学部の部員
あやめ	スクールカウンセリング研修生
みう 美雨	歴史考古学部の部員
ひびき 響	歴史考古学部の部員
まいら 舞良	歴史考古学部の部員
ちなみ 知波	歴史考古学部の部長

○女子トイレ

個室で民俗学の本を開いている夏乃子。顔が本で隠れている。絵麻が夏乃子の隣に入る。携帯を耳にあて、
絵麻「お姉ちゃん、そろそろミートソース作りに帰ってきてよ。
お母さんが作ると酸っぱすぎるんだもん。え？ みんなだって
お姉ちゃんの帰り待ってるしさ。うん……そうそう」

夏乃子が慎重に本から顔を離すが、ペンを落としてしまう。
絵麻の足元にペンが転がってくる。絵麻がそれを拾ってト
イレから出ると、夏乃子がいる。絵麻、驚く。

絵麻「ずっといたの……？」

夏乃子「そう、サボってた……遠野さんも？」

絵麻「まあ、うん。（ペンを見せて）これ、仁科さんの？」

夏乃子「（受け取る）うん、ねえ、今誰としゃべって……」

絵麻「ごめん、急いでるんだ。また部活でね」

絵麻は駆け足で出て行く。

○カウンセリングルーム

椅子に座っている美雨と、窓を眺めているあやめ。

あやめ「私はブス？ って検索する女の子は、月に1万人いるん
だってね」

美雨「でも、こ、こんなことで学校休むなんて、ばかですよ」

あやめ「どうして。それがあなたの悩みなら、ばかじゃない」

美雨「……お、同じ部活に、お姉さんを亡くした人がいます」

あやめ「かわいいそうに」

美雨「せ、正確には山で遭難して、1年も行方不明らしいんです
けど、多分もう……。でも、毎日ちゃんと学校に来てます」

あやめ「……その子の名前は？」

美雨「そ、それは……」

あやめ「大丈夫。カウンセラーには守秘義務があるから、ここで聞いたことは誰にも言わない」

美雨「遠野絵麻……。絵麻に比べれば、私は恵まれてる……」

あやめ「……藤田さん。ちよつとこうしてみて」

あやめが両の手の平を出すと、美雨は真似をする。あやめは美雨の隣の席に座り、美羽の手を握る。

あやめ「これは接触療法といって、不安を和らげるの」

美雨「はあ……」

あやめは微笑んで美雨を抱き締める。

美雨「えっ？」

あやめ「大丈夫、大丈夫……。不安が小さくなっていくでしょ」

美雨「そ、そ、そうかも……？」

あやめ「藤田さんが自信を失くすようなことを言う人がいたら、許しちゃだめ」

美雨「はい……」

あやめ「その人の言葉が、自分の耳に入らないようにするの」

あやめは美雨を離し、じっと見つめる。

美雨「……せ、先生？」

あやめは美雨にキスをする。

○カウンセリングルーム・外

カウンセリングルームから美雨が出てくる。

美雨「先生、ありがとうございます……」

あやめ「どうしたの？」

美雨「吃音が、治ってる……！」

あやめ、微笑む。

○歴史考古学部・部室

響が刀を舞良に向かって振り下ろす。

夏乃子と美雨は資料を作成している。

響「たあああっ！」

白羽取りをする舞良。

舞良「ふっ、甘いね」

夏乃子、響と舞良をちらつと見る。

響「なに！？ 名刀おし切り長谷部を防ぐとは……だあっ！」
入室してきた絵麻に刀が振り下ろされる。

絵麻「わっ」

響「うわっ！？ ごめん！」

絵麻「何その刀」

舞良「あ、これ良いでしょ？ 研究発表の時、使おうと思って」

響は刀を教鞭の代わりにして黒板を指し、
響「それでは、こちらの図をご覧ください。的な」

そこへお土産を持った知波が入って来て、

知波「資料作成のほうは進んだ？」

舞良「げっ部長だ！」

響「修学旅行どうだった？」

知波「怖かった……クマが爪研いだ痕が木に残ってて……」

知波は散乱した白紙のボードを見て、

知波「絵麻、響、舞良」

絵麻「は、はい」

知波「ぜんっぜん進んでないけど、この一週間何してたの？」

舞良「えへ」

響「まあ、とりあえずおみやげ食わせろー」

知波「ちよっと！ 不真面目な人は食べちゃだめ！」

美雨「私も食べたい」

響「ダイエツト中じゃなかったっけ？」

美雨「私、太ってる？」

響「金剛力士像並みにねー」

美雨がゆっくり響に近付き始める。

美雨「響ちゃん。私って、醜い？」

響「は？ マジにすんなし」

舞良「夏乃ちゃんも食べよーよ？」

夏乃子「いい」

絵麻「……部長、話があるんだけど」

知波「何？」

絵麻「あのね、私、よく考えたんだけど……」

響「うわあっ!？」

絵麻が振り向くと、響の首を美雨が掴んでいる。

知波「な、な、何してんの!？」

美雨「人を傷つける言葉は、聞いちゃダメ」

絵麻「離して!」

絵麻が美雨を引き離そうとすると、美雨の体がぶつかって

お菓子が夏乃子のボードに落ち、その上に絵麻が倒れる。

夏乃子「あああゝっ!？」

絵麻「わ、わ、わ、ごめん!」

静まり返る室内。夏乃子は立ち尽くした後、鞆を持って出

て行こうとする。

絵麻「どこ行くの？ ま、待って」

夏乃子は走って去っていく。

絵麻が追いかかけようとするが、足を捻挫したことに気付く。

舞良「あ、あたしが行くよ」

絵麻「うん……」

知波は床に崩れ落ちている響をさする。

知波「美雨、なんでこんなことしたの？」

美雨「何が？ あ、せっかくのお土産もったいなーい」

美雨は落ちた菓子のクリームを指で取って舐める。

美雨「ん、おいし」

怪訝そうに美雨を見る絵麻、知波、響。

○廊下

舞良が部室から出る。そこにはあやめが立っている。

あやめ「何かあったの？」

舞良「えっと、どなたでしたっけ？」

あやめ「宮川あやめです。カウンセラーの研修で来てる」

舞良「そうなんだ？ すいませんちよっと急いでるんで」

舞良は駆け足で行こうとすると、あやめが舞良の手を掴む。

舞良「……先生？」

あやめ「困ってるんでしょ。助けてあげよっか」

あやめは舞良を自分に引き寄せる。

○廊下

絵麻が歩いている。カウンセリングルームから舞良が出てくる。

絵麻「舞良、ここにいたの？ 仁科さん、いた？」

舞良はふらふらと歩いて行く。

絵麻「舞良……？」

絵麻、舞良の背中を見送り、教室札を見上げる。

○教室

鐘の音。一枚の書類を持って絵麻が教室に入る。教材を鞆に仕舞う知波。絵麻が知波に近づく。

知波「絵麻？」

絵麻「昨日話そうと思ったんだけど……」

絵麻はそつと知波の机に退部届を置く。

知波「嘘でしょお……今日これで2枚目」

知波は鞆から退部届を出す。仁科夏乃子の名前。

絵麻「私のせいかも……完成してたボードがあんなになつて」

知波「そうじゃないよ。うちの部、活動は不真面目だし、その上

部員同士の仲も悪くなつてきてる……辞めてもしようがない」

絵麻は苦笑する。

○部室

夏乃子がボードを拭いている。絵麻、入室。

絵麻「真面目だね。活動日じゃないのに」

夏乃子「書き直さないといけないから」

絵麻「本当にごめんね……」

夏乃子「別にいい、もともと気に入ってないから」

夏乃子がボードを放る。

絵麻「仁科さん、部活、辞めるの？」

絵麻、ボードを拾って眺める。

絵麻「私も辞める」

夏乃子、絵麻を見る。絵麻はボードを夏乃子に見せて、

絵麻「すごいタイトルだね。虫の民俗学？ 民俗学……？」

夏乃子「そんなタイトルじゃ誰も興味を持たない」

絵麻「んなことないよ。こことか面白い。虫の知らせや、魂が蝶

になる伝承など、虫と迷信の関係は古来から深く……ふふ」

夏乃子「ほら。ばかにしたでしょ」

絵麻「違うの、お姉ちゃんみたいだと思っただけ」

夏乃子「絵麻のお姉ちゃんって……」

絵麻「そう。行方不明の……虫の社会や感情を研究してた」

夏乃子「この間、トイレで電話してた？」

絵麻「あれは……」

夏乃子「誰と会話してたの。幽霊？」

絵麻、沈黙。

夏乃子「……小さい頃、母が言った。死んだら必ず蝶になって私に会いに来るって」

絵麻「お母さん、亡くなったの？」

夏乃子「そう。私は6歳だった。蝶を見かけると母だと思って追いかけて回した……そうすることで寂しくなくなった」

絵麻「……素敵だね」

夏乃子「10歳になる頃には、やめた。冬になるとつらいから」

絵麻「つまり……真冬に蝶はいないから？」

夏乃子「そう。でも、1%でも母に再会できる可能性があるならと思うと……未だに、調べずにいられない。こういうことを」

絵麻「……それなら尚更これは、捨てちゃだめだよ」

絵麻がボードを渡すと、夏乃子が受け取る。

夏乃子「私は打ち明けた。だから、あなたも教えて」

絵麻「……でも」

夏乃子「お姉さんの幽霊と、話してたの……？」

絵麻「……あの時電話は、どこにも繋がってなかった」

夏乃子「……どういうこと？」

絵麻「お姉ちゃんが東北の大学に行っちゃってから、毎晩電話してた。習慣なの。だから……寂しくなってどうしようもなくなつたとき、ああやってお姉ちゃんに電話するふりをして……」

夏乃子「……そう。気持ちを落ち着けてたわけね」

絵麻「……仁科さん」

夏乃子「……なに？」

絵麻「下の名前で呼んでも良い？」

夏乃子、ぎこちなくうなずく。

○廊下

座って指のささくれをむしる舞良。そこに知波が現れ、
知波「舞良？ そんなところ座っちゃお尻汚れるよ？」

舞良「……ねえ、何か楽しいこと、ない……？」

知波、舞良の手を掴んでむしるのをやめさせる。

○部室

ささくれをいじる舞良。その傍で資料を作る美雨。

○廊下

美雨と舞良の様子を見ている絵麻、夏乃子、響、知波。

響「なんか、部室の空気……重いんすけど……」

知波「舞良の指が血だらけになっちゃいそう」

響「美雨も変じゃね。舞良があんな落ち込んでたら、どうしたの

く、悩み聞こうか」とか言ってウロウロするのが美雨だ」

夏乃子「誰だって一定じゃない。気にしすぎだよ」

絵麻「そういえば、舞良がカウンセリングルームから出てきたの

見たよ」

響「え、まじで。美雨も通ってた」

知波「みんな悩みがあるんだね」

響「……先生になんか吹き込まれたんじゃないの？」

知波「そんなカウンセラーいる？」

響「知らね。ちよっと乗り込んで来てやる」

絵麻「ええっ!? やめなよ！」

響「黙って見てなっつて」

響、行ってしまふ。

○部室

ガラッと勢いよく開く扉。肩で息をする響。

絵麻「どうだった？」

響は真っ青な顔で鞆を掴んで走り去る。

知波「響！」

絵麻、夏乃子、知波は顔を見合わせる。

夏乃子「……カウンセリングルーム、行ってくる」

絵麻「私も行くよ」

知波「や、やめなよ、なんか怖くない？」

絵麻「様子見に行くだけ！」

絵麻と夏乃子は行ってしまふ。

○カウンセリングルーム

扉を開けてそっと入る絵麻と夏乃子。

絵麻「こんにちはー」

夏乃子「……誰もいない」

絵麻「わっぷ！」

夏乃子「なに!？」

絵麻「あごめんごめん、顔に蜘蛛の糸がかかってさー」

夏乃子「私にもかかった」

絵麻「これのせいだね。響ああ見えて蜘蛛大っ嫌いだから、シヤ

ワーでも浴びに帰ったんだと思う」

夏乃子「……つままないな。今のでピンときたのに」

絵麻「何が？」

夏乃子「女郎蜘蛛という死者にとりつく妖怪がいる」

絵麻「へー。ジョロウグモ」

夏乃子「人間の口から感情を食らい尽くすっていう……」

絵麻「まさか美雨や舞良がああなった原因だと思ってる？」

夏乃子「ちよっとね。実はかなり冷や汗かいてる」

絵麻「ふふ…：夏乃子ってロマンチストだよね」

夏乃子「そう思ってくれる人は少ない」

絵麻「この先生ってどんな人か知ってる？」

夏乃子「まったく」

夏乃子が机の引き出しを開ける。写真付きの社員証を取り、

夏乃子「宮川あやめ、スクールカウンセラー研修生」

絵麻が社員証を勢いよく奪う。

絵麻「そんな…：」

夏乃子「絵麻？」

絵麻「…：お姉ちゃんだ」

夏乃子「…：それはあり得ない」

絵麻「なんで！？」

夏乃子「ずっと行方不明だった絵麻の姉が、何の目的で自分の妹

がいる学校に来るの」

絵麻「わからないけど…：何か理由があるのかも…：」

夏乃子「どんな？」

絵麻「直接本人に聞く」

夏乃子「絵麻、何かおかしい。一旦戻ろう」

絵麻「お姉ちゃんが妖怪だとしても？ おかしいのはそっちだよ」

夏乃子「…：そうかもね」

夏乃子はその場を後にする。

○部室

夏乃子が部室に戻ると、舞良が倒れている。

美雨は淡々と資料を作成している。

知波「起きて！ 舞良、起きて！」

夏乃子「何があった！？」

知波「わからない、ただ、私……私のせいかも……」

夏乃子「どうして！」

知波「舞良の指が……ボロボロだったから……ハンドクリームを塗ってあげてたの……そしたら急に……」

夏乃子が机に出ているハンドクリームを取ってよく見る。

夏乃子「蜂毒が入ってるみたい」

知波「うん、そうそれ、もしかしたらすごく有毒だったのかも」

突然舞良が起き上がる。

知波「舞良！？」

舞良「うわっ！？ なにこれ、私まさか気絶ってやつ？」

知波「苦しくない？ つらくない？」

舞良「え、全然。なんかむしろすごい元気い」

知波「良かった、舞良……笑顔が戻って……」

夏乃子「蜘蛛の天敵は……蜂」

夏乃子はクリームと刀を掴んで、走り出す。

夏乃子「これ借りる！」

知波「夏乃子？」

○カウンセリングルーム

あやめが入室する。

あやめ「あ……いらっしやい。お待ちせしちやったかな」

絵麻「……やっと、会えた」

あやめ「どうぞ、座って。ゆっくりお話ししましょ」

絵麻「……この1年ずっとお姉ちゃんに会いたいって思ってた」

あやめ「お姉さんに？」

絵麻「毎朝起きるのがつらくて、学校にいても楽しくなかった、勉強も部活も身が入らない……でも笑い続けた。これ以上家族が苦しむのは見たくなかったから……けど、もう限界」

あやめ「……苦しかったね」

絵麻「何度も思った。お姉ちゃん、どうしてちゃんと死んでくれなかったのって。いつそ死んでくれてたら気持ちの整理がついたのって……でも……生きててくれた……！」

あやめ「……絵麻？」

絵麻、頷く。

あやめ「絵麻……！」

あやめは絵麻に触れ、抱き締める。更にキスをしようとする。咄嗟に絵麻があやめを突き飛ばす。

絵麻「何……なんなの……？」

あやめ「落ち着いて」

絵麻「お姉ちゃん？ お姉ちゃんじゃ、ないの？」

あやめ「絵麻」

絵麻「……お姉ちゃんは、死んだの？」

あやめ「……ええ」

絵麻「どうして……」

あやめ「お姉さんは山奥で、虫のことを調べてた。でも落雷で木が倒れてね、一部の道が閉ざされた。それで山の中を迷って……町に戻れなかった。だから、私が体をもらったの」

絵麻「体をもらうって、何？ 返してよ、お姉ちゃんの体」

あやめ「どの道助からなかった」

絵麻「そんなの……」

あやめ「絵麻。あなたの悲しみは計り知れないほど深いはず……。

私とその悲しみから、解放してあげる」

絵麻「感情を……取るの……？ やめて！」

絵麻、後ずさるが足に痛みが走りよろめく。

あやめ「どうして。悲しみが何かの役に立ったことがある？」

絵麻「でもこれは、これは……私の……私達の……」

そこへ刀を持った夏乃子が入ってくる。

絵麻「夏乃子……」

夏乃子「……この人はお姉さんだった？ 絵麻」

あやめ「絵麻」

夏乃子「お姉さんだった！？」

絵麻「……違うっ！」

夏乃子はいやめに斬りかかる。あやめは避けて刀は机に当たると。

あやめ「そんな偽物じゃかすり傷にもならないよ」

夏乃子が再度斬りかかるが、あやめが夏乃子の腕を封じ、刀が落ちる。夏乃子は絵麻のほうに刀を蹴る。

絵麻「やめて……！」

夏乃子「絵麻、逃げて……」

あやめ「絵麻。痛みは捨てましょ。前進するために」

絵麻、夏乃子を見る。

絵麻「……だめ。夏乃子の気持ちが変わる人でいたい！」

絵麻は刀を拾い、あやめを斬り付ける。あやめ、一瞬笑うが、たちまちに激しく痛がり、夏乃子が解放される。

夏乃子「蜘蛛に蜂毒はさぞきついでしょ」

あやめ「蜂……？ 刀に毒を……？」

絵麻、再度刀を振り上げると、あやめが逃げる。

絵麻、崩れ落ちる。夏乃子は絵麻を支える。

夏乃子、絵麻を見て笑う。絵麻、笑いながら泣く。

○部室

空になったハンドクリームを絞り出す知波。

知波「出ない……私のクリーム勝手に使ったの誰！？」

夏乃子「知らない」

知波は匂いを嗅いで回る。

知波「みんなこの匂いする！ 全員共犯者だ！ もく！」

舞良「大事なら隠しとけばいいじゃない」

美雨「あ、あやめ先生って辞めちゃったのかな？」

響「研修が終わったんじゃないかね。てか相談ならうちらにしなよ」

絵麻が走って入ってくる。

絵麻「ごめん、遅れましたー」

知波「あ……絵麻」

部室が静かになる。

絵麻「なに、うちがお葬式挙げたからって気い遣ってんの？」

知波「もう落ち着いたの？」

絵麻「うん。お姉ちゃんの遺体が見つかって家族もだいぶ吹っ切れたみたい」

知波「そっか」

絵麻「あ、それからね、私達の退部のことなんだけど」

夏乃子「そう、退部はやめた」

知波「本当に？」

美雨「ふ、二人、退部？」

絵麻「しないってば」

知波「ね、絵麻は忙しかったし、発表は無理してやらなくても……」

絵麻「ううん、絶対やる。家で色々調べてきたし」

響「今からやって間に合うかー？」

夏乃子「全員で手伝えばなんとかなる」

舞良「しゃーない、やったるぞー！」

絵麻、満面の笑み。